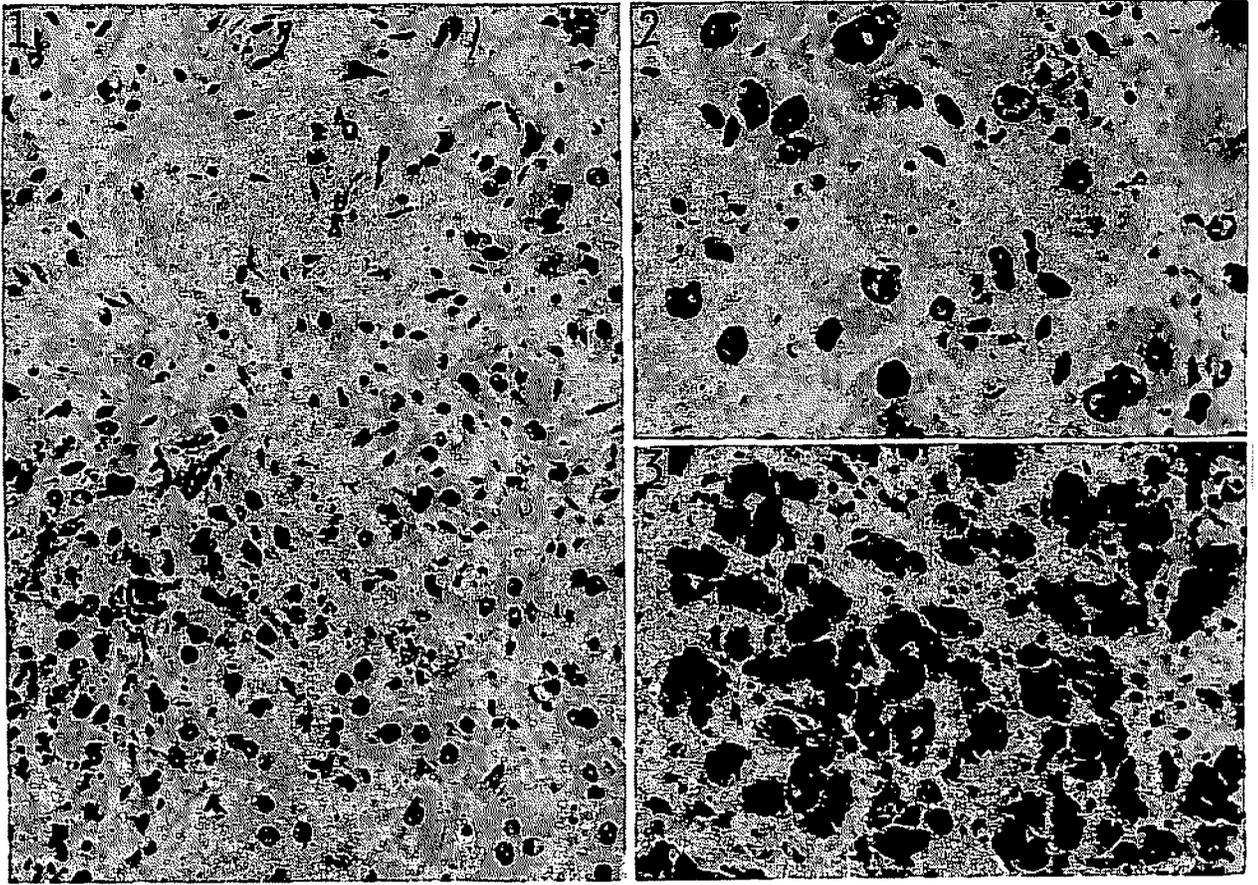


牛の肝臓

家畜衛生試験場北海道支場出題 第13回獣医病理学研修会標本 No.183



本例は2才の短角種雌牛の肝臓である。この牛は北海道別海町某牧場で生産され、乾草と米糠で舎飼、5月下旬から野草地も含む野付半島放牧場へ放牧されていた。放牧場にはとくに注目される毒草はないとされている。6月20日に元気消失、可視粘膜の充血、腹囲の膨満、強度下痢（油状下痢便）、胃腸蠕動の停止、脚部痙攣、皮温不整などの異常を発見したが、血液学的所見および血液の生化学的検査ではとくに異常は認められなかった。治療としては450 mlの輸血と2・3の対症療法的な投薬を行なったが、異常発見後の23日に死亡した。

肉眼的所見：下腹部、下顎部の皮下水腫。多量の黄色透明な腹水の貯溜。肝は3.45kg、やや柔軟で小葉不明瞭、混濁、煮肉様（固定後、軽度に硬く、小葉像明、淡黄灰色斑交錯）。心は1.35kg、心嚢水腫、心内外膜の点状出血。腸管の水腫と点状出血。リンパ節の腫大。脾は780g、血量乏しく濾胞やや不明瞭。そのほかには著変はなかった。

組織学的所見：肝小葉は全般に正常構造が失われ、葉間結合組織線維の増生が著しく（写真1の上方部分）、それが中心静脈を囲む小葉中心帯部にも認められ、写真1

および2のように肝小葉の萎縮、肝細胞索の乱れ、および肝細胞の退行変性が強い。肝小葉中心帯から中間帯部に重度の脂肪変性があり（写真3、脂肪滴はSudanⅢ染色で暗調の広い細胞質となっている）、ことに中心帯部では肝細胞の核は融解、崩壊、濃縮し、間葉性細胞、好中球の軽度の浸潤を伴う部分もある。また、巨核、双核性肝細胞などの再生像も介在している。小葉周辺帯部では肝類洞の拡張、血液の鬱滞を示す部分が不規則に分布し、一部には小出血がある。グリソン氏鞘は結合組織の増生で形状不整となり、軽度の胆管増殖があり少量のリンパ球集簇が認められる所もある。

組織学的には脂肪変性を伴う（中毒性）肝硬変と診断される。

このような肝所見を持つ死亡牛が、昭和43年以来、特定の飼育場の牛に発生している。これらの死亡牛の経過は本例とほぼ同様である。米糠多給の影響か、あるいはCenecio属植物（ハンゴンソウ、サワギク、ノボロギク、キオンなど）中毒か、今後の検討課題である。

写真説明：写真1、×130、H-E染色。写真2、×260、H-E染色。写真3、×130、SudanⅢ染色。